

# 大竹博明さん、最良の一日

## 校友会会員の大竹さん (51回)、 小林 覚 九段に三子局にて対戦し勝利

いつもは大竹先生とお呼びしているが、ここでは大竹さんと書かせてもらおう。医師の世界も、私の住む囲碁の世界も先生ばかりで、わけがわからなくなりますから。

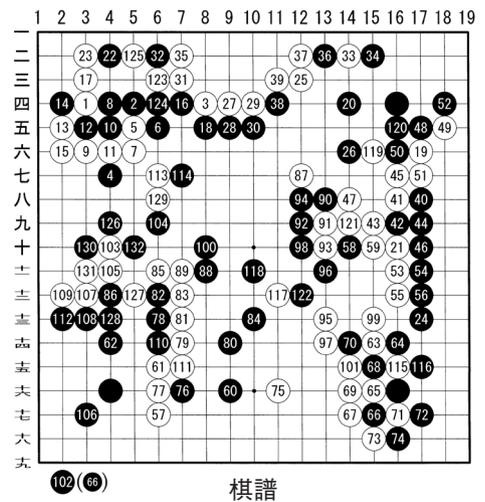
大竹博明さんと碁の関わりは古く、戦前までさかのぼる。大竹さんの碁好きの父君が中国・上海で歯科を開業し、そこで出会ったのが白鳥澄子さん（日本棋院棋士六段、もうすぐ100歳になる碁界最長老）だった。大竹少年も自然に白鳥門下となり、戦後の一時期、専門棋士をめざして院生（棋士の養成機関）に身を置いた。高校進学、そして日本歯科大学進学で棋士への道はあきらめたものの、棋力はアマチュアのトップクラスである。碁界で大竹さん知らない者はいないといってよく、藤沢秀行名誉棋聖がタイトル戦のとき、むし歯で苦しんでいるのを治療し、土下座せんばかりに感謝されたのは有名な話。私も歯ではずいぶん

お世話になった。

その大竹さんが平成30年10月1日（月）、ケーブルテレビおよびスカパーの『囲碁・将棋チャンネル』に出演し、プロ棋士の指導を受けた。指導棋士は日本棋院副理事長で棋聖のタイトルを獲得したことのある小林覚 九段。解説は前名人の高尾紳路九段。こんな豪華な棋士陣は滅多にない。

応援団もすごい。大竹さんが所属する「藤沢会」の仲間とその指導棋士（釘持 丈 八段、孔令文七段、藤沢里菜女流名人）、日本歯科大学校友会の面々、大竹さんと親交のある福井正明九段、長原芳明七段（大竹さんとは院生の同期）、そして筆者。総勢25名ほど。

結果は三子の手合（ハンディキャップとして黒が三つ置くこと）で、みごと中押し勝ち（途中で小林九段が負けを認め、双方の地を数え



ることなく終局すること)。全員が大竹さんの応援なので、小林九段が打ちにくかったことを差し引いても、堂々たる勝ちっぷりだった。

大竹さんいわく、「最後まで打たれたら自信がなかった」。

対局が終わって、日本棋院のある市ヶ谷で大祝賀会。もちろん大竹さんは対局中とは違って変わって終始ニコニコ。「生涯最良の一日でした」とおっしゃるのも頷けますね。

（囲碁観戦記者  
秋山賢司・記）



対局前の一コマ。碁盤を挟んで右が小林 覚 九段、左が大竹博明さん。



対局を終えて。大竹博明さんの右が小林 覚 九段、左が高尾紳路九段。大竹さんのうしろに奥様。あとは藤沢会の仲間と指導棋士。